

地域の隠れた宝さがし から交流が生まれる ～フットパスが拓く可能性～



濱田 暁生 (はまだ あきお)

(株)シー・アイ・エス計画研究所代表取締役会長、NPO法人ふらっと南幌代表理事、フットパス・ネットワーク北海道幹事

1943年旧満州国撫順市生まれ。68年北海道大学大学院工学研究科建築計画修士課程修了。同年東海大学札幌校舎工学部建築学科講師、70年建築設計事務所(株)アトリエブंक設立、同社取締役企画調査部長を経て、89年(株)シー・アイ・エス計画研究所設立、同社代表取締役社長。2004年から現職。道内各市町村の景観・まちづくりを手がけ、その実践活動を通じて蓄積されたノウハウと人材情報のネットワークを活用して、「住民と行政」「都市と農村」「ハードウェアとソフトウェア」をつなぐ媒介的コーディネーターとして活動中。

はじめに

2014年11月9日、晩秋の積丹町美国地区で興味深いフットパスの試みが行われた。「積丹町美国地区商店街活性化プロジェクト」の一環である「美しい国フットパス事業」試行モニタリング事業である。テーマは「晩秋の積丹町を歩こう!」。「歴史ある積丹町美国地区の風景、自然～建物～町並みと秋の味覚、そして、地元との交流を楽しむ」として企画されたものである。現地事務局は積丹町商工会、企画プロデュースは(株)シー・アイ・エス計画研究所、総合支援・協力はNPO法人ふらっと南幌、そして、現地対応・おもてなしは、積丹町民有志+一般社団法人積丹やん衆小道協議会という多様な連携によって運営された。札幌市、南幌町、北広島市、江別市、厚田村、当別町、帯広市などからの参加者32名、現地での受入れ・案内を含めた地元参加者16名と盛況であった。地元にとってはほとんど初めてのフットパスとして手探り状態での取り組みだったが、当日の参加者のなごやかで楽しい様子、コース途上や休憩地点でごく自然に生まれた交流の温かな雰囲気等から、非常に有意義な成果が得られたようだ。終了後のアンケートの結果にも参加者の高い満足度が表れていた。

本稿では、当日の様子とともに、私が代表を務めているNPO法人ふらっと南幌の取り組みを紹介しながら、最近、全道各地で盛んになってきた「フットパス」が地域のまちづくりや観光振興、地域産業活性化等に果たす役割とその可能性について考えてみたい。

隠れた地域資源の発掘・再評価からフットパスの展開へ

今回の積丹町美国地区での取り組みは、まず、地域の歴史遺産「旧ヤマシメ福井邸及び付属石蔵」の保全活用に取り組んでこられた積丹やん衆小道協議会からの相談がきっかけとなった。私がまちづくりプランナーとして手掛けてきた北海道の戦略プロジェクト「歴史を



黄金峠を背に石造りの漁協倉庫を見た後、思い思いに美国漁港岸壁へ向かう

活かすまちづくり」と、それに関連した江差町や松前町、寿都町等の歴史的な建物・町並みの調査・保全・整備・活用等における実績とともに、NPO法人ふらっと南幌での「農都共生型フットパス」に関する豊富な経験に期待しての声掛けであったようだ。

南幌町では、平成12年以来、地域に埋もれていた歴史的資源「幌向駅通^{えきと}※1」「幌向運河」等を見つけ出して再評価し、それらを保全活用しながらその価値を引き継ぐための活動を続けてきた。「ちょっと変わった古い家」という程度に軽く見られていた建物が、実は開拓当時に地域の発展に大きな役割を果たした「幌向駅通」であり、さらには、北海道内各地に現存する駅通遺構の中でも際立って特徴的な“洪水対策の高床式構造”を持っていることが分かった。この建物は現在民間の所有となっているが、私たちの働きかけで平成18年11月に国の「有形登録文化財」に指定された。

続いて市街地を流れる何の変哲もない小川が、実は、かつて地域の水運を支え、かつ湿地帯の排水の役割を果たしてきた「幌向運河」という歴史的資源であることが分かった。歴史的背景を知ることによって、今までとは異なる“地域の宝物”として光を放つ存在に変わってきたのである。それらの存在を広く伝え、その価値を考える機会として「運河・駅通まつり」を続けたことによって、「フットパス」との大きな出会いが生まれることとなった。

年々盛んになってきた「運河下り」の中で、平成16年前後から運河沿いを歩くことを取り入れたことをきっかけに、フットパスの勉強を始め、故辻井達一氏や小川巖氏（エコ・ネットワーク代表）等の御指導を得ながら、「南幌らしいやり方」を模索し、みんなで知恵を出し合いながら手法を整えていった。地形的にほとんど平坦で山や丘がなく、大規模農地が広がり、スケールは大きいやや単調な風景で、これといった観光資源に乏しい南幌の弱点を、「毎月第3日曜日10時集合」という単純ルールの「月例フットパス」等の創意工夫で補っていった。

一方、積丹町美国地区の取組みは、最初からフットパス的活動が念頭にあったようで、当初は「積丹町美

国^{にしんぼ}鯉場プロムナード研究会」でスタートし、平成23年には、積丹やん衆小道協議会設立に至り、歴史的遺産の再生活用策として、旧ヤマシメ番屋を美国地区に数多く残されている鯉関連の歴史遺産を巡る小道の遊歩の拠点とすることが目標とされていたようだ。

積丹町は、変化に富んだ海岸線や岬の風景、積丹ブルーと呼ばれる美しい海の色、町内各地に点在する石蔵や番屋・商家、寺社等の歴史的遺産といった豊富な地域資源に恵まれている。「点をつないで線に」「線を拡げて面に」という展開の可能性を強く感じた。地元商工会事務局を中心に、コースを彩る地域資源・魅力ポイントのリストアップから始め、経験豊富なふらっと南幌関係者の参画を得て、ルートの設定が行われた。秋も深まり、あまり寒くならないうちに、コースとしての評価・検証を行うための「試行モニタリング事業」を実施することとなった。途上のガイド、休憩拠点での食べ物・飲みもの提供と交流等地元の受入れ体制構築に向けて、多様な主体の連携となったのである。

実感できた可能性、大きな波及効果の予感

フットパスへの取組みは基本的には、「できることから少しずつ始める」「自分たち自身も楽しみながら」「それぞれの得意分野を活かして役割分担しながら」「町内を歩き回って地域の代表的ビューポイントや新たな魅力的資源を見つけ出し、より興味深い史実等を調べ上げ、それらを参加者に伝えるためのガイドとしての勉強もしながら、コースに取り込んでやってみる」といった感じで、ごく自然な流れで無理をせずに始められるものである。

実際に南幌では、仲間内で「楽しかったからまたやろう」と繰り返しやっていく中で、地元の農家や商店などの方々の理解が進み、「食の楽しみ」や地場農産物購入等に協力していただけるようになって“農業のまち南幌らしい魅力”が高まり、参加者も増えていった。農家の奥さんから「フットパス歩きに来られる方々との交流のおかげで、忘れかけていた“農業の喜び・やりがい”を、思い出すことができた」といううれしい評価をいただいたことも私たちに勇気を与えてくれ

※1 駅通

明治から昭和初期まで北海道辺地の交通補助機関として、宿泊・人馬継立・郵便などの業務を行う制度・施設。

た。参加者の喜ぶ姿や寄せられた感想等から、「農都共生・交流」の方向性が見えるとともに、その可能性の大きさが実感されるようになってきた。

今回の「試行モニタリング事業」は、対照的な性格の町同士の連携という意味でも条件に恵まれていて、良いスタートを切ることができたようだ。ルート設定の調査に訪れた際に、ふらっと南幌で取り組んでいる「Eco田んぼ米」（無農薬無肥料で育てられた“ゆめぴりか”）を手土産にお持ちしたところ、美国の宿泊施設の料理人から、「当日は、このおいしいお米と積丹の新鮮な魚貝類のコラボで海鮮丼を」との思いがけない提案があり、参加者一同大満足といううれしい出来事があった。両町の関係者の間では今回の「試行モニタリング事業」だけでなく、今後ぜひ、「海の町と内陸の町」「漁業の町と農業の町」「変化に富んだ海岸風景と平坦でおおらかな田園風景」等、お互いにあるものを補い合って楽しむ交流を継続することが約束されることとなった。

来訪者の反応で地元が気づかされる新たな魅力要素

今回の「試行モニタリング事業」で特徴的だったことは、地域の魅力の感じ方の来訪者と地元とのギャップを地元スタッフが認識したことであった。物見遊山型観光客とは異なり、フットパス愛好者は、一見派手ではなくても、地域に根差した暮らしの中からにじみ出るその町らしいたたずまいや生活感のある風景などを好むことに気付かされたようだ。地元お勧めのビューポイントより、民家の軒先に干された大根の連なりや漁家の干場の乾しガラ、冬に備えて壁一面に軒先まで積まれたストーブ用の薪などの風景に人気があった。あるお宅の庭先にわずかに残っていた柿の実も注目の的で「多分北限では」と写真に収める人や、寺まち界隈では銀杏拾いにいそしむ人も見られ、季節感を感じながら普段はできない体験を楽しんだようだ。

コース上の魅力要素だけではなく、おもてなしとして提供された食べ物などに関しても、来訪者と地元の人々との意識の相異がみられた。アンケートの結果では、ゴール地点の「鯉伝習館ヤマシメ番屋」で供され

たお汁粉や赤カブの酢漬けの評価が高かった。今後に向けての要望においても「三平汁」等の地域に伝わる伝統的な料理や加工体験等へのリクエストが多かったこと等、地域の普段の暮らしの姿に触れることへの関心が高いことがうかがえた。

受入れサポートを担った地元のメンバーからは「普段どおりでよければ気が楽だ〜」という^{あん}安堵の声も聞かれた。大規模なまちづくりイベント型の取り組みよりは、「ふらっと南幌」のようなゆるいやり方の小規模で持続的な運動型の手法の方が、フットパスにはなじむようで、それが「歩く文化」の醸成と「地域への定着」につながるものと思われる。

観光と異なってリピート利用の比率が高いフットパスでは、体験型・交流型の楽しみの要素とともに、日々の暮らしの中で感じられる季節感や地域独自の生活文化に対して目を向けていくべきだろう。それは、同時に、地元の住民がその町ならではの暮らしの魅力を再確認することにもつながることであり、フットパスの波及効果のひとつといえる。

フットパスの効果：歩くことによって得られること

「ふらっと南幌」のこれまでのフットパス関連活動の実践の中で実感してきたことを列挙する。

- ① のんびり歩くと五感で感じるが多くなる。
⇒ 心が開放され普段と異なる感覚が息づく。
- ② 歩くことで地域のことが良く伝わる。
⇒ 地元ガイドの適切な情報提供で一層興味深くなる。
- ③ 一定時間共通の体験をすると人は仲良くなれる。
⇒ 「自然」「歴史」「農業」等々、興味関心の似通った人のグループが自然にできる。
- ④ ごく自然に「ふれあい」や「交流」が生まれる。
⇒ 特に農家さんのお話を聴くことによる共感や農業体験は効果的。
- ⑤ 歩くとお腹が減り、食事がうまい。
⇒ みんなで楽しむ南幌名物ジンギスカン・地場野菜のバーベキュー（BBQ）や^{あぜ}畦道や土手で広げるお弁当は大人気。

⑥ 歩いた後の温泉や“一杯”は格別。

⇒ ビールや酒はもちろん、たとえ、水でも。地場農産物、食品・飲み物、お土産等の購入とともに、地域の飲食店・レストラン・カフェ、温泉、宿泊施設等の利用等で地元消費の拡大につながる。

このように、フットパスを歩くことの効用とともに、多くの人が地域を訪れることによる効用もあるのだ。

南幌では、フットパスの好ましい印象のほとんどは、地域の田園風景に依存しているが、来訪者が増えると「見る一見られる」の関係の意識が高まる。農家さんの農の営みの設え、家周辺環境や農地・農道等の修景・美化・整頓の面での取組みが進むことによって、地域の景観イメージがさらに向上し、観光や地場産品販売等におけるブランド価値を高めることにつながると期待される。

フットパスの特性と必要な条件：地域資源の活用手法

地域における景観・まちづくりの取組みの中でのフットパスの特性と、実施するために必要な条件として感じていることを挙げる。

◎ 特性：お金がかからない！

⇒ 既にある資源：ビューポイント、史跡、休憩拠点等を抽出し、周辺環境に手を入れて整えるだけで充分。

◎ 必要な条件：

■ 歩きやすく安全なコースの適切な設定が必要！

⇒ 長短のバラエティ：参加者の体力や当日の天候に合せた対応が必要。

⇒ コース特性の組み合わせ・変化等：特徴ある「テーマ」、「物語性」。

⇒ 清潔なトイレや休憩所の設定：特に、高齢者や女性の利用への配慮が必要。

⇒ 初めての人にもわかりやすいマップと標識の準備：手作りで可だが、地権者・管理者や農家さんの事前了解を。

■ 地元詳しいガイドと運営サポートの人材が必要！

⇒ 地域の歴史・文化・自然・産業等に関わる地元メンバーの趣味や特技を活かせる。

⇒ 役割分担のバックアップ・サポート体制の準備。

⇒ 質の高い持続的活動のためには、担当者の自己研鑽と後継人材の育成が必要。

フットパスの実践手法：仕組みづくり

私たちがこれまで南幌でやってきたやり方は非常に現実的である。フットパスとしての魅力を高めるために必要なことは、臆することなく積極的にチャレンジすると同時に、本業を持ちながらNPOの活動にボランティア的に参加するという人材の限界や活動財源の乏しさ等の厳しい過程の中でも自分たち自身が楽しめることをまっとうに続けることに尽きる。日々の取組みの中で心掛けたことを以下に列挙する。

- ① まず、自分たちが歩いて楽しんでみながら、さらに楽しくするための創意工夫を盛り込む。
- ② 魅力あるポイントを抽出し、それらをテーマやストーリーでつなぐ長短の幾つかのコースを設定する。
- ③ わかりやすい目印やビューポイント、休憩拠点等の条件をチェックする。
- ④ 「食べる」「買う」「体験する」などの楽しみに協力してもらえる農家、飲食店、観光施設等を確保する。
- ⑤ マップや標識等を手作りで整える。
- ⑥ 得意分野や特技を持ったガイド人材を発掘・育成する。
- ⑦ まずは地元を中心に試行実験し、運営上の課題や参加者の反応をみる。
- ⑧ 試行の繰り返しの中で運営と評価が安定してきたら、恒常的なコースに仕立てて、情報を発信していく。
- ⑨ コースとして使いながら必要な施設・設備等のハードウェアを徐々に整えて、さらに魅力を高めていく。

「つなぐ」ことから「交流」が生まれる。ふらっと南幌が地域活動の軸としてきたフットパスへの取組みの中で果たしてきた役割は、

- 地元住民と来訪者を
- 農業生産者と消費者を
- 都市と農村を
- 南幌と他のまちを

○ さまざまな分野の専門家と地元の素人を「つなぐ」ことである。この重要性を認識するとともに、そこから生まれる可能性の広がりも強く実感している。

私たちの「月例フットパス」の参加者が、歩く行事の際の農産物購入から、さらに積極的に農家さんとの関係を強め、毎月定額購入・宅配の契約をされた例もある。農家さん側でも、特に有機栽培に取り組まれている意欲的な方々は、来訪者とのふれあいや交流を楽しみにされている。フットパス歩きの途上で立寄る際には、朝取りの収穫物をおすそ分けで振る舞っていたり、わざわざ、調理してごちそうしていただいたりする例もかなりあり、参加者から大変喜ばれている。「都会の消費者が健康と食の関係を気にしていることがよく分かる」「『おいしかったのでまた欲しい』の言葉がうれしい」「丹精込めて作っているものを待つという方がいるということが、やりがいにつながる」等の声も寄せられている。消費者が生産者を支える仕組みへの可能性も感じている。

フットパスによる体験&交流型観光の可能性と広域型観光の新しい姿としてのロングトレイル

イタリアのトスカーナ州やフランスのプロバンス地方の例にも見られるように、美しい景観、農村風景は、地域の魅力を訴求するイメージ戦略上の重要な条件であると思われる。多くの有名観光地の例に見られるように、歴史的建物や街並み・文化的遺産等の存在や食べもののおいしさとともに、「絵になる風景」は、観光地として、また、別荘地、移住地としての高い価値を広く伝える上で非常に重要な役割を果たすのである。

北海道の豊かな自然だけではなく、自然と近接したまちの暮らしや先人たちの努力によって整えられた農村の営みの美しく雄大な風景こそが、国内だけではなく海外、特にアジアの人々にとって、大きな魅力なのではないだろうか。その魅力の楽しみ方の新しい姿としてフットパスの可能性があると見えるのだが、最近、注目されるのが広域型ロングトレイルである。

これまでの取り組みでは、単一自治体内でのフットパ

スイベントにおける交流参加や開催協力としての相互乗り入れ等にとどまっていた。しかし、ロングトレイルになれば連続宿泊や長期滞在、ガイドや送迎のビジネス化等による波及効果の増大にもつながることが期待される。

特に、広域型ロングトレイルの下地として、国土交通省北海道開発局による「シーニックバイウェイ北海道」や北海道後志総合振興局による「羊蹄山麓広域景観づくり」、近年人気が高い上川から十勝をつなぐ「北海道ガーデン街道」等の継続的取組みがある。それらの活動成果として、これまで地域が蓄えてきた力によって、北海道らしい「農村風景」を活かした新たな観光の姿が生まれてくる可能性が高まってきた。

一方、「ロングトレイル」は、北海道らしい広大なスケールを活かせる半面、長距離にわたるコースの整備・維持・管理の負担、トイレや休憩拠点の適正配置、地域ごとの個性の発揮や「シークエンス景観^{※2}としての冗長さ」への対応策等の課題もあるように思える。平成24年、小川巖氏の呼び掛けにより全道各地域のフットパス関係者が結集して新たに組織された「フットパス・ネットワーク北海道：FNH」による今後の全道的連携の展開が、それらの解決につながることに期待したい。

FNH(フットパス・ネットワーク北海道) 加盟団体一覧(2015年2月現在)

振興局	市町村	団体名	主なフットパス
石狩	札幌市	さっぽろフットパス倶楽部	【太平百合が原フットパス】五の戸の森から旧琴似川コースほか
空知	南幌町	NPO法人ふらっと南幌	幌向運河コースほか
	滝川市	江部乙丘陵地のファンクラブ	【江部乙丘陵地フットパス】丘の辺コースほか
後志	ニセコ町	ニセコフットパスファンクラブ	【ニセコフットパス】文学・歴史の散歩道ほか
	黒松内町	黒松内町フットパスボランティア	【黒松内フットパス】チョボシナイコースほか
胆振	白老町	植物ボランティアサークルサリカリア	ウヨロ川フットパスほか
日高	平取町	仁世学園	【平取フットパス】けもの道とクロームコースほか
	えりも町	えりも町郷土資料館N42°の会	猿留山道ほか
上川	上富良野町	NPO法人環境ボランティア野山人	千望峠バスほか
オホーツク	西興部村	西興部村フットパスを楽しむ会	宮の森フットパスほか
十勝	新得町	ヨークシャーファーム	旧狩勝線フットパスほか
	豊頃町	東十勝ロングトレイル活動協	東十勝ロングトレイル海のルート
	浦幌町	議会	東十勝ロングトレイル山のルート
根室	根室市	酪農家集団AB-MOBIT	厚床バスほか

※2 シークエンス景観
視点の移動に伴い継ぎ的 (sequence) に変化する景観。